

《ロマネスク》概念の誕生：ノルマン ディー好古家協会と好奇心の美学

SAKAI, Takeshi / 酒井, 健

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

41

(発行年 / Year)

2010-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010644>

《ロマネスク》概念の誕生

——ノルマンディー好古家協会と好奇心の美学

酒 井 健

はじめに

《ロマネスク》とは、11-12 世紀の教会建築に充てられる様式概念である。現在では、12-14 世紀の《ゴシック》様式と対になってよく用いられている。

ただし使われだしたのは、《ゴシック》の方がずっと早かった。16 世紀、ルネサンス期イタリアの人文主義者たちが、北方ヨーロッパに由来する教会建築をゴート人に結びつけて軽蔑まじりに《ゴート人の》つまり《ゴシック》と呼んだのだ。この教会建築の特色をなす度を越した高さへの欲求、彫刻装飾の過剰さが彼らには不快だったのだ。対して、古代ギリシア・ローマ時代の調和と節度のきいた建築は彼らの尊敬の的だった。

このルネサンス人の理性主義的な建築観は、その後も古典主義文化のなかで広くヨーロッパの人々に行き渡り継承されていった。とりわけフランス人は 19 世紀に入ってもまだこの建築観を支持していた。が、そのなかにあって、中世の教会建築に好奇の目を向ける者も現れだした。ノルマンディー地方の好古家たちだ。《ロマネスク》なる語は、この人々によって、19 世紀初めに《ゴシック》に先立つ建築様式概念として、用いられだしたのである。

たしかに、その当初《ロマネスク》概念には依然として、古代ローマの建築の調和美に劣る、そこから退化した、といった否定的な意味合いが込められていた。しかしそれでも「ノルマンディー好古家協会」の人々は、そのようなロマネスク教会堂の否定的な面に、つまりゴシックとはまた違って非理性的な面に、魅せられてもいた。

好古家（仏語で antiquaire, 英語で antiquarian）とは耳慣れない言葉だが、考古学者（仏語で archéologue, 英語で archaeologist）が考古学という学問を

確立しだす以前に、つまり 19 世紀半ば頃以前に、先史時代から中世までの遺物、遺構を熱心に調査していた人々のことである。彼ら好古家の探究にはたしかに考古学者のような厳密な体系性や科学性はまだ見られないが、しかし対象への感性、対象と感性の次元でコミュニケートする姿勢はすぐれていた。冷静な「考古」とは違った姿勢が彼らの「好古」にはあって、その姿勢がとりわけ中世の教会堂の探究には大きく功を奏していたのである。

都市に聳^{そび}えるゴシックの大聖堂もそうだが、地方の修道院や村落にひっそり立つロマネスクの教会堂にも、それ特有の仕方で理性的な調和・節度を破っていく力が表出している。いびつで不格好な作り、異様な彫刻装飾にこの非理性的な力の湧出は感じられる。ノルマンディーの好古家たちはこの面に強く興味を引かれ、「好奇心をそそる」（仏語で *curieux*）という形容詞を多用して彼らの感性の呼応を表現していった。

本稿では、ロマネスク教会堂に見られる非理性的な力の湧出と、彼らノルマンディー地方の好古家たちの好奇心との呼応を明示していきたい。その際、この好古家たちのなかでも二人の人物に注目し、彼らがとりわけ好んだロマネスク教会堂を紹介していきたい。一人は、《ロマネスク》概念の生みの親シャルル・ド・ジェルヴィル（Charles de Gerville）である。もう一人は、ジェルヴィルの後継者で「ノルマンディー好古家協会」を創設し、その機関誌を通して《ロマネスク》概念の流布に尽くしたアルシス・ド・コーモン（Arcisse de Caumont）である。彼らがことのほか関心を示した二つの教会堂には私も実際に訪れ、心を揺さぶられた。一人のささやかな好古家の記述として、私自身の感性の呼応も記しておきたい。

1. タンのサン・ピエール教会堂

牧歌的な自然のなかで

めざす教会堂に行くのには村からさらに何分も歩かねばならなかった。

樹木の生い茂る村道をしばらく進んでいくと、にわかに視界が開け、牧草地の向こうの木立ちの影にその教会堂の姿が見えてきた。

北フランスのノルマンディー地方の大都市カンから 10 数キロ北西にタン（Thaon）という村がある。その村からさらに半キロほど森のなかを行っところ、にサン・ピエール教会堂は立っていた（カラー図版 1, 2）。



カラー図版 1
タンのサン・ピエール
教会堂（11-12 世紀）
森と牧草地のなかの教
会堂

カラー図版 2
タンのサン・ピエール
教会堂
東側から



カラー図版 3

タンのサン・ピエール
教会堂

左が西正面扉口，南側
と北側軒下にはずらり
とモディリオンが並ぶ



カラー図版 4, 5, 6, 7 モディリオンの彫刻



11 世紀から 12 世紀にかけて建てられたロマネスク様式の小さな教会堂である。

牧草地には小川が流れ、岸辺の茂みには白や藤色の花が咲いていた。

その岸辺の道を歩いていくと、ささやかな木の橋が小川にかかっていた。そこはもう教会堂の敷地の入り口で、見上げれば、鐘塔がしっかり空に向かって伸びている。

6 月のよく晴れた午前のこと。澄んだ大気に黒つぐみの声が高らかに響き渡り、草を食む牛たちの声がのどかな気配をかもしだしていた。

このような地方の牧歌的な雰囲気こそロマネスク教会堂の世界なのだと私は思おうとした。穏やかで清らかで心和む自然。そのなかに慎しやかに立つ教会堂。周囲の安らかな風景とともにこちらの気持ちを癒してくれる小ぢんまりした教会堂。それがロマネスクの教会堂なのだと。

異様な彫刻の群れ

しかしサン・ピエール教会堂の周囲を歩いているうちに、私は、そのような平和な思いとは別の思いに襲われた。屋根のすぐ下の軒持送り（モディリオン）に施された小さな彫刻の群れ、このロマネスク特有の造形表現を、私は顔を上げて、一つ一つ目を凝らしながら見て回ったのである。そしてそれらの像の異様さに心を掻き乱されてしまったのだ。

その彫刻群は教会堂の南側と北側の軒下に合わせて 100 個ほど並んでいた。主として人間の顔、動物の顔が彫り込まれていて、何かを言いたげにこちらを見下ろしているのだが、一つとして同じ像はなく、しかもそれぞれの像の表情、姿たるや、どれも尋常ではなかったのである。

巨大な舌を真横にして口から露出させている男。頬をひどく引きつらせて乱ぐい歯をのぞかせている男。軽蔑まじりに目を大きく見開き、口髭を鼻の下から左右に細長く伸ばしている灰汁の強そうなシャーマン風の男。口をぽっかり開け、驚いた様子の猿。耳まで裂けた口から恐ろしげに歯をむきだして笑っている人間だか山猫だか判別しがたい生き物。ただ呆然と遠くを見やっているふうの四つの顔。上下に二つずつ寄りそっているところからすると親子なのかもしれない（カラー図版 3, 4, 5, 6, 7）。

ヤモリのように軒下にしがみついて顔をこちらにのけぞらせている滑稽な姿の男もいる。何かにびっくりして体を縮こませ目を丸くしているおちょぼ口の

素朴な人。トイレでしゃがんで息んでいるような格好と形相の男。下からだとその下半身は丸見えだ。そうかと思えば、両脚をわざわざ上げて陰部の穴をこちらにさらけだしている女もいる。そして股間に手をやり^{せんず}千擦りに耽っているような男。

これが本当にキリスト教の聖堂なのかと思ってしまう。聖書や聖人伝とは直接何の関係もない表現の群れなのだ。神への敬意はどこにあるのか。神の下位に来るとはいえ、人間はもう少し尊厳のある姿で表現されてもいいのではないか。

いったい何を考えて中世の人はこのような異様で多様な彫刻を軒下に飾ったのだろうか。詳しいことはよく分かっていない。起源ということでは、古代ケルトの人頭崇拜があげられている。ケルトの人々は言わば首狩り族で、切り取った敵の頭を自分の馬の鞍に吊るしておいたり、家の入口に飾っておいたという。人間の頭には特別の力がこもっていて、予言や予見の効果、さらには魔除^{まじ}けの働きがあると信じられていたからだ。じっさい古代ケルトの貨幣には、馬に人頭をぶらさげて疾走する武将たちの図像があるし、ケルトの神殿入口の遺跡として髑髏^{ざれこうべ}がいくつも埋めこまれた石柱が残されている。また、アイルランドのクロンファートに立つロマネスク様式のノートル・ダム大聖堂の西口正面には、15 個の人頭彫刻が下から 5, 4, 3, 2, 1 ときれいに三角形になるように並べてはめこまれている（カラー図版 8, 9, 10, 11）。

11-12 世紀フランスのロマネスク教会堂の何たるかを考えるとき、紀元前数世紀からこの地に存在していた古代ケルトの文化は、たとえ 1 千年以上の時が経過していたとはいえ、生きた伝統としてきわめて重要であり、念頭に置いておく必要がある。教会堂の軒下に顔の彫像が並べられるようになった由来も、ケルトの魔除けの風習にあるのだろう。だが一つ一つの彫像の表現それ自体は、とてもケルトの人頭崇拜からは説き明かせない。紀元前のケルトの人々が残した人頭彫刻、そしてクロンファート大聖堂西正面のそれにしても、予言や予見の力が期待できそうな^{おこぞ}厳かで^{せいひつ}静謐な死者の霊を思わせるが、軒持送りの彫刻の方は、いずこのロマネスク教会堂のものも、生者の生き生きした表情を浮かべており、しかも猥雑であったり滑稽であったりする。邪悪な霊から聖堂を守るにしてはすでに邪悪でありすぎて、本当に守っているのだろうか、むしろ邪悪な霊と結託しているのではなかろうかとさえ思えてしまう。

2. 非理性的な湧出

内奥を露に示す

中世の人々が軒持送りの彫刻の一つ一つにどのようなメッセージを込めていたのかは文献の資料がなく、定かには分らない。しかしタンのサン・ピエール教会堂の周囲を見て回っているうちに、私は、それらが或る共通の傾向に貫かれていることに気がついた。

その共通の傾向とは、内奥のものが表出することへの強い関心である。内に秘められていたものが表に出てくることへの強い好奇心である。

内に秘められていたものとは、肉体の部位で言えば、口の内部、舌や歯であり、また下半身の陰部であったりする。眼球も^{まぶた}瞼の被いが上げられて通常より大きく露出している。だがさらに重要なのは、それら秘められた肉体の部位を露呈させるに到った心の動きである。心の奥底で何かしら感情が生じて、それが表に出てようとしている。この感情の動きは、喜怒哀楽さまざまだ。陽気な笑いの衝動であったり、驚きや蔑みであったり、はたまた下品な仕草で人を挑発して楽しむからかいの気持ちであったりする。

つまり、これらの彫刻では、心の中から感情が表出てきたために、それにとまって日頃は隠されていたり閉ざされていた肉体の部位が^{あらわ}露に示され、大きく開かれるに到ったということなのである。

我々の感情はじつに多様であって、その多様さがこれら 100 あまりの軒持送り彫刻では猥雑な面にまで立ち入って、みごとに表現されている。

“みごとに”というのは、この場合、こちらの心をも刺激して何がしか感情を表出させる力を持っているということだ。そこにこれらの彫刻のもう一つの共通点がある。強い喚起力があるということだ。

これらの彫刻には、見る側の者をただ見る立場に放っておかないで、そこから引きずり出そうとする力がある。今日の美術用語でいうデフォルメがきいていて、顔の輪郭や目鼻立ちのバランス、顔と胴体のバランスが壊されて、心の動きが強烈に表出している。そのため、見る側の心も動かされ、彫刻が表出させている感情の方へ、引きこまれていく。

見る側の反応はもちろん一律ではない。同じ彫刻を見上げて感動する者もいれば、嫌悪感を抱いたり、畏怖の感情を覚える者もいるだろう。この多様な反応に対して、これらの彫刻は、こう反応すべきだと明確な指針を打ち出してい

るようには見えなかった。感情が出てくることそれ自体を求めている、しかも出てきた感情のどれとでも共存できるしたたかさをもっているように見えた。

アニマ（生命）への愛着

感情のことを今、内面の生と呼んでおこう。

感情は、目には見えないが、我々の内部で、ことあるごとに生起する。生きている限り、我々の心のなかに生じ、顔の表情や手足の動作になって表に出てくる。感情は我々が生きていることの証しだ。

ヨーロッパ中世の人々は、内面の生が自由に表に出てくることを好んだ。“自由に”と言っただけではまだ足りない。度を越して豊かに、強く、出てくることを好んだ。顔の表情や手足の動作といった目に見える外面の生の形が壊れるほどに、ふだんのそれらの形が崩れてしまうほどに、内面の生が表出することを好んだ。

内面の生は感情だけではない。論理的に考えたり、何かを綿密に計画したりする理性の働きも含まれる。そしてまた、心のなかであれこれ思い浮かべてそれを何かしらイメージや物語に組み立てていく想像力も含まれる。ヨーロッパ中世の人々は、この理性の働きや想像力においても、度を越した表出を好んだ。13世紀のスコラ学者たちが書き著した神学書はそれぞれ常軌を逸した分量の大著であったし、ゴシック様式の大聖堂はどこの都市の建物も異常な高さを求める建築計画であったため中世においては完成に到っていない。想像力にしても、ゴシック、ロマネスクを問わず、異様な怪物の彫刻が見られるし、聖書写本の装飾図像においても、植物だか動物だか判然としない異様な幻想の表現が侵入している。

ヨーロッパ中世の人々は、内面の生の表出を人間だけでなく、動物や植物、さらに岩や水などの無生物にも感じとっていた。一般にアニミズムと言われる傾向だが、宗教の原始的な形態の意味合いでこの言葉は使われることが多く、私はそのような劣った評価に抵抗を覚える。むしろ彼らのこの傾向は、語源になっているアニマ（anima, 生命）への強い愛着だったと解したい。彼らの生への愛着は広大で深かった。まさしくアニマは、アニマル（animal, 動物）だけではなく、自然界のすべてのものに浸透していて、それらを根底からアニメートしている（animate, 生き生きさせている）。

この生命への愛着は日本人にも見出せる。彼らヨーロッパ中世の人々は異常

に隆起した岩に、あるいは泉から豊かに湧出する清水に特別な生氣を感じていたが、これは日本の神道の根源にある自然崇拜にもつながる面だ。そして現代のヨーロッパの子供たちに大人気の日本のアニメにも通じる面だろう。妖怪や猫型ロボット、さらにクレヨンやアンパン、こげパンに至るまで、日本のアニメ制作者はアニメの奇想天外な表出を図像にしている。

3. 古代と近代の狭間で

ルネサンス期イタリア人の美意識

ともかくも、中世以前のヨーロッパの人々、とくに古代ギリシア・ローマ文明を担った人々は、人間や事物の通常の外観を乱すような激しい内面の生を好まなかった。少なくとも造形表現（建築、彫刻、絵画）の分野ではそうだった。彫刻や絵画においては、人間の通常の外観を尊重しながら、それをいっそうバランスのとれた姿で表現することが多かった。外見の形に注目し、それを写實的に再現し、さらにそこにいっそうの調和を与えて理想的な姿に作りあげていたのである。建築においては古代ギリシアの神殿や古代ローマの水道橋は大規模だが、けっして安定感をそこなうような試みはなされなかった。異常な高さの追求や左右非対称の作りは拒まれた。

この節度のきいた造形表現は、15-16世紀のルネサンス期イタリアの文化人たちによって高く評価された。その一方で彼らは中世の造形表現を、節度を欠いた非理性的な蛮行とみなして軽蔑した。拙著『ゴシックとは何か』の「プロローグ」および第2章第2節で彼らのゴシック批判を紹介した⁽¹⁾が、ゴシック建築の常軌を逸した高さ、過剰な装飾は、古代ローマを侵略したゲルマン民族の一派ゴート人の作風と誤って彼らに認識され（ゴシックという言葉はこのときに用いられたイタリア語ゴティコ [gotico = 「ゴート人の」] に由来する）、この侵略ともども手厳しく批判された。ゴシック様式だけでなく、中世全般が、理性の光のささない闇の文明、いや文明の名にすら値しない野蛮な非文明の時代とみなされたのである。

フランス古典主義

このようなルネサンス期イタリア人たちの文明観、すなわち古代ギリシア・ローマ文明への敬意、中世への蔑視は、そのまま、後の西欧諸国の古典主義文

化に継承されていった。とりわけフランスでは、政治体制の変化にかかわらず、古典主義が国是として肯定されていった。パリの凱旋門はローマのそれを手本に 1806 年に着工され 1836 年に完成されている。ギリシア神殿そっくりのパリのマドレーヌ寺院も 1840 年に完成されている。

その後も古典主義の理性的な美の表現は、近代フランス社会の推進者たちによって根強く支持された。その推進者たちの内訳は、中央集権制を地方のすみずみにまで徹底させて画一的な国づくりをめざした為政者たち・官僚たち、近代産業の合理的にして功利的な発展を欲した資産家たち・中産階級の市民たち、そのような政治と産業の世界に人材を送り続けた教育者たち・学者たち、近代フランス社会の擁護にまわっていた知識人たち（医者、弁護士、芸術家、ジャーナリストなど）である。

中世を再評価した人々

このような 19 世紀フランスの近代人のなかにあって中世ゴシックに好意的な目を向けていた文化人も少なからずいた。世紀前半のロマン主義の作家たち（シャトーブリアン、ユーゴ）、世紀末の象徴主義の芸術家たち（ユイスマンス、ガレ）である。

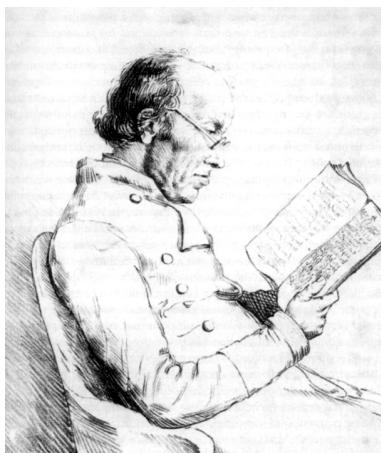
しかしさらに、19 世紀初めにおいて、いまだ古典主義の美の規範（節度、簡素さ、調和、均斉）に従いながらも、ロマネスク教会堂に心引かれ、その存在を闇のなかの中世から明るみへ出そうと努力していた一群の人々がいた。ノルマンディー地方の好古家たちである。そのなかには、ロマネスクという様式名の生みの親シャルル・ド・ジェルヴィルもいた。私が、タンのサン・ピエール教会堂という無名に近いロマネスク教会堂を訪れてみる気になったのは、このジェルヴィルがことのほかここを好んでいたことによる。

4. ノルマンディー地方の好古家たち

ロマネスクという名称の生みの親

シャルル・ド・ジェルヴィル（1769-1853）は、ノルマンディー地方の小貴族の出で、博学の人だった（モノクロ図版 1）。地質学、植物学、経済学、政治学、考古学、言語学とじつに多くの学問分野に関心を持ち、実地踏査にも熱心だった。性格の方はすこぶる悪く、彼を知る人で彼のことを良く言う

人は一人もいなかった。傲慢にして猜疑心が強く、頑迷。自分の非をけっして認めようとしないう偏屈屋で、しかも極度の女性蔑視者。邪悪な霊にいくつも棲みつかれたようなこの人の性格の異常さは、現代フランスの精神分析医によってパラノイア（偏執症）の症例研究に扱われたほどである。題して「低ノルマンディー地方^{せきがく}の碩学シャルル・ド・ジェルヴィル（1769-1853）の症例——ユーモア、同性愛、パラノイア」⁽²⁾。



モノクロ図版 1
シャルル・ド・ジェルヴィル

「モンタリヴェ調査」と「ラボルト調査」

だが当時ジェルヴィルは、ノルマンディー地方きっての好古家ということで、1810年に国から発令された「モンタリヴェ調査」では地元マンシュ県の知事に登用されて、県内の中世教会堂の現状調査にあたっている。

この「モンタリヴェ調査」の背景について簡単に述べておこう。

1789年に勃発したフランス大革命は、二つの特権階級すなわち王侯貴族階級とキリスト教聖職者階級への都市民および農民の反抗として推移したが、そのなかでフランスの教会堂、修道院は次々破壊、略奪の対象になっていった。この「文化財破壊」（ヴァンダリスム）の蛮行には反省や批判の声が上がり、すでに革命政権の時代から為政者たちの間でも文化財保護策が検討されはじめていた。ナポレオン帝政の内相モンタリヴェはこれを継承し、まずは中世の歴史遺産がどれだけあり、それらがどのような状態にあるのか、全国規模で調査に乗りだしたのである。

この「モンタリヴェ調査」は結局、半数の県も応じないうちにナポレオンが失脚したために頓挫したが、続く王政復古の時代に行政官ラボルトが引きついで、1818年「ラボルト調査」を発令した。ジェルヴィルはこの時に再度登用されている。痛風に苦しみながらも彼は、マンシュ県の450にのぼる中世の教会堂へ、馬を駆っては次々に踏査に向かったのだ。

野外調査だけではない。彼は研究書にも積極的にあたった。イギリスから図

版入りの高価な文献を取り寄せて読みふけたのである。そのなかにはアンドリュー・コルティエ・デュカレル（1713-85）の好著『ノルマン人の英国支配時代の歴史遺産』（1767）（カラー図版 12, 13）もあった。

イギリスの先進性

拙著『ゴシックとは何か』の第3章「ゴシックの復活」の第1節でも触れたが、イギリスはヨーロッパのなかでも最も早くにゴシック・リヴァイヴァルを経験した国であり、中世教会堂研究の分野でも当時の先進国であった。その拠点「ロンドン好古家協会」はすでに1707年に設立されている。大方のフランス人が古典主義に染まっていた、フランス中世の歴史遺産には冷淡であった18世紀に、イギリスの好古家たちは探究心に燃え、本国だけでなくフランスへも（とりわけノルマンディー地方へ）調査に訪れて、みごとな研究書を出版していた。デュカレルも「ロンドン好古家協会」の一員であり、1752年にノルマンディー地方の主要都市カン、バイユー、ルーアンを訪れている。

このときの滞在をもとに執筆され1767年に出版された『ノルマン人の英国支配時代の歴史遺産』についてここで詳しい紹介を試みることはできないが、次の二点は、のちに言及するジェルヴィルの捉え方を理解するうえで、つまりジェルヴィルのあみだしたロマネスク概念の先駆的考察を知るうえで、重要である。すなわち第一点として、デュカレルはこの1767年の研究書においてすでに、中世教会建築に尖頭アーチと半円形アーチの二様式があり、半円形アーチの方が年代的に古いと指摘していること。第二点として、半円形アーチの起源が古代ローマの建築に求められるとしていることである。この第二点に関し、デュカレルは、古代ローマの建築がイギリスに入ってきたことの証左としてペーダ（673?-735）の『イギリス教会史』（731）の1節（第5巻第21章）を紹介し、「ローマの様式」というペーダのラテン語を引用しているのだが⁽³⁾、この「ローマの」（Romanorum）というラテン語はジェルヴィルが「古代ローマ風の」（roman）というロマネスク概念のフランス語表記を生みだすときにヒントになったと思われる。デュカレルは、まだゴシックという言葉で中世の教会建築を一括している。しかしそこに異なる二つの様式があることに気づいており、しかも年代の早い様式に古代ローマとのつながりを見出している。ゴシック様式を尖頭アーチの教会建築に限定し、新たにロマネスク様式という言葉を作りだして古代ローマからの変移として半円形アーチの教会建築を識別し

カラー図版 8

Roquepertuse 出土のケルトの人頭彫刻（前3 - 前2世紀）、マルセイユ地中海考古学博物館所蔵



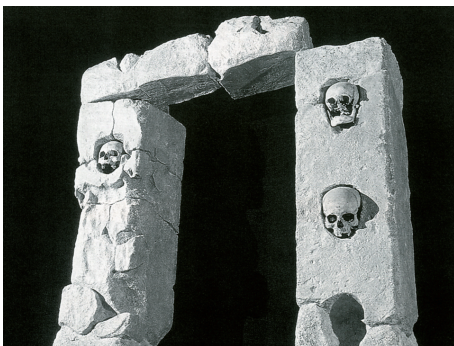
カラー図版 9

カラー図版 8 の彫刻，右正面から



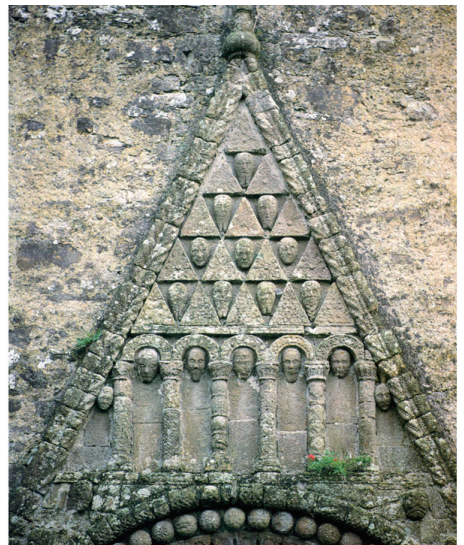
カラー図版 10

Roquepertuseのケルトの扉口, (前3 - 前2世紀), マルセイユ地中海考古学博物館所蔵



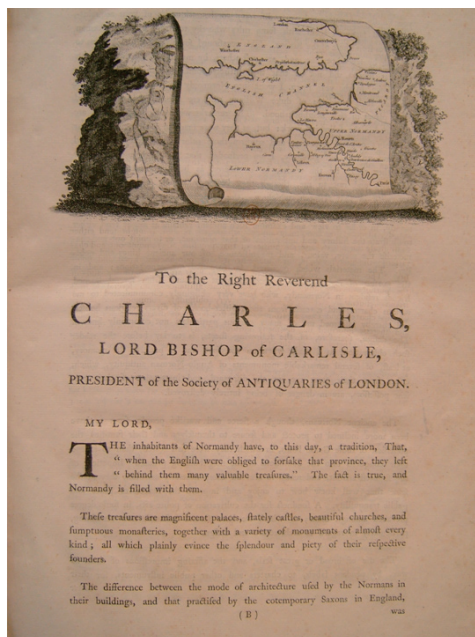
カラー図版 11

アイルランド, クロンファート大聖堂の西正面 (12世紀)



カラー図版 12

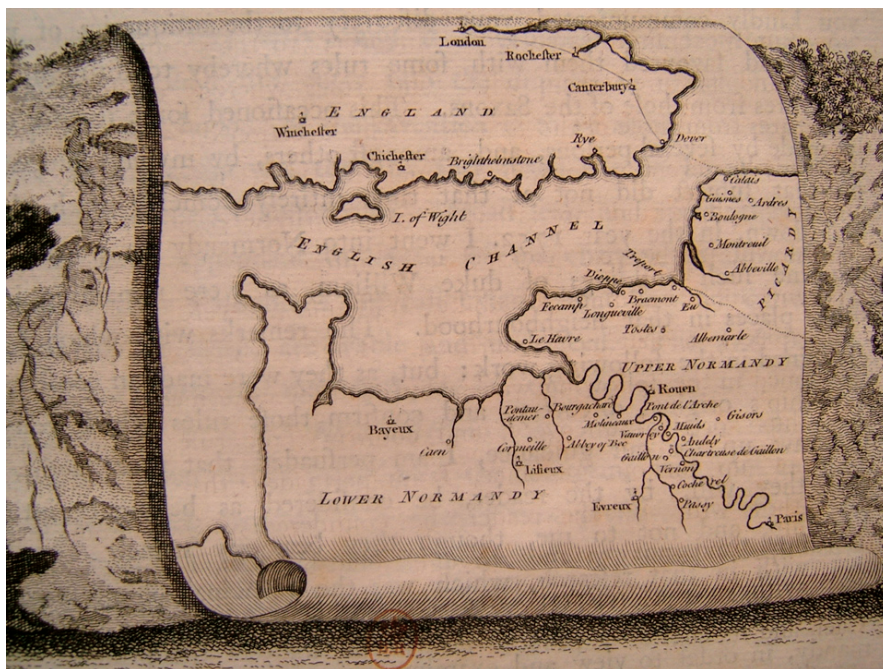
デュカレルの *Anglo-Norman Antiquities*
(1767 年) の序文 最初の頁



カラー図版 13

上図の上の部分の拡大図

上半分がイギリス、下半分がノルマンディー地方



ていくジェルヴィルの創意の一步手前にデュカレルはいたのである。

英仏海峡を挟んでの往来

それにしても、なぜイギリスの好古家たちはフランスのノルマンディー地方に強い関心を示していたのだろうか。その理由はデュカレルの研究書の題名にある「ノルマン人の英国支配時代の」という言葉（Anglo-Normand）にもうかがえる。つまり、ノルマンディー地方が中世の教会堂建築の一大ルーツであったということだ。

ノルマン人とは、元来、北方ヨーロッパのスカンジナビア地方に住んでいたゲルマン民族の一派であって、8世紀以降しきりに船で南下して、ヨーロッパ各地で略奪行為を働いた。いわゆるヴァイキングである。そのうち彼らの一部が北フランスの一画、セーヌ河下流域一帯に定住するようになり、911年にはそこのノルマン人酋長ロロがフランス王より公爵に任じられ、この一帯はノルマンディー公国と呼ばれるようになった。

1066年になると、イギリス王エドワード懺悔王の正当な継承者を自任するノルマンディー公ウィリアムが、海峡を渡ってイギリス征服へ向かう。のちにノルマン・コンクエストと呼ばれるようになる軍事行動である。その際、彼は、征服後イギリスのキリスト教化に鋭意努める旨をローマ教皇に誓って、その支持を取りつけ、自軍を神の軍隊にまつりあげることに成功していた。そして征服を果たすと、彼はじっさいにイギリスにノルマンディー地方の様式の教会堂を次々に建てていったのである。

デュカレルの研究書では、そうして建てられたノルマン様式の教会堂に、装飾の少ない、あってもジグザグ模様程度の装飾しかない、簡素な半円形アーチが目立つ点が指摘されている。デュカレルは、これをノルマン・コンクエスト以前にイギリスに存在していたサクソン人の建築様式、つまり彫刻装飾の豊富な半円形アーチの様式と対比させて語っている。彼は、1752年のノルマンディー滞在の際に、カンなどの大都市でこの簡素なノルマン様式を確認したのだったが、しかしウィリアム公の支配が行き届かない小さな村、例えばタンのような村の教会堂においては彫刻装飾は依然豊かに施されていたのである。ジェルヴィルを始めとする「ノルマンディー好古家協会」の人々は、この点にまで観察の目を差し向けていた。

他方で、フランス大革命のさなかには、地理上の近さから、ノルマンディー

地方およびブルターニュ地方の貴族で海峡を渡りイギリスに亡命する者が多数いた。イギリスの好古家たちがノルマンディー地方にやってくるのとはちょうど逆の現象が起き始めたのだ。じっさい彼らのイギリス亡命は単なる亡命に留まらず、中世へ覚醒する文化体験にもなっていた。つまり彼らフランスの貴族たちのなかには、イギリスでゴシック・リヴァイヴアルの気運を体感し、中世教会堂を見直す必要性を痛感して帰仏する者が少なからずいたのである。若きジェルヴィルがそうだった。『キリスト教精髓』（1802）を出版して、文化財保護を求める世論に拍車をかけたシャトーブリアンもその一人である。

やがて、イギリスと敵対していたナポレオンの政権が1815年に完全に消滅すると、ノルマンディー地方とイギリスの文化交流はさらに活発になった。イギリスから刺激を受けてノルマンディー地方はフランスのなかで中世教会堂研究の先進地域になっていった。その先頭に立っていたのがジェルヴィルだったのである。

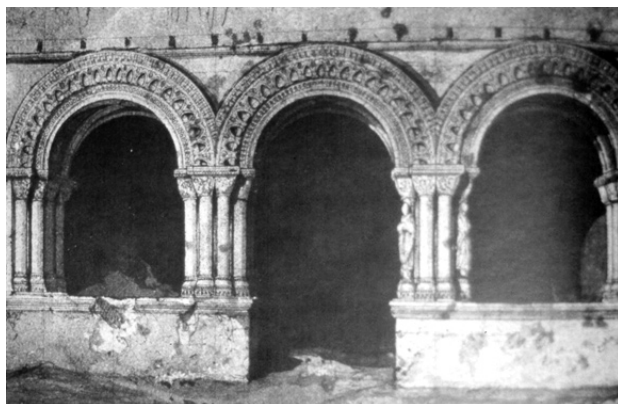
5. ロマネスク概念の誕生

包括的概念の欠如

帰仏後のジェルヴィルは、イギリスの専門書を渉猟するだけでなく、イギリスの好古家たちと書簡のやりとりをして、彼らの最新の研究成果の摂取に努めていた。さらに、1818年、ロンドンの「好古家協会」の会員で水彩画家のジョン・セル・コットマン（1782-1842）が来仏したときには案内役をかってでている。その際おそらくジェルヴィルは、コットマンから直接にイギリス中世の教会堂の様子と解釈の現状を聞きだすことができたはずである。コットマンは、最新の光学装置カメラ・ルシダを駆使して、ノルマンディー地方の中世教会堂を正確に描きとめ、それをイギリスのノーフォーク地方の中世教会堂と比較して紹介する書物を企てていた（モノクロ図版2）。

だが、これほど人や文献にあたっても、ジェルヴィルは、求めていた一つの重要なことを見出すことができずにいた。それは、ゴシック以前の中世教会堂を総称する様式名である。ゴシック様式の大聖堂とは明らかに異なる12世紀以前の中世教会堂を名ざす包括的な名称である。「ラボルド調査」の報告書を作成するうえでも彼は、分類に必要な不可欠なこの基本用語を探し求めていた。

「ロマネスク」（romanesque）という英語のもとになったフランス語「ロマ



モノクロ図版 2

コットマンの水彩画。ボシエルヴィルのサン・ジョルジュ教会堂の教会参事会室のアーケード。1818-1821 年制作。ロンドン大英博物館所蔵。

ン」(roman) は、こうしたなかでジェルヴィルによって生みだされた言葉にほかならない。

「古代ローマ風の」

以下は美術史のなかで「ロマン」なる様式名が文字として最初に登場する資料である。ジェルヴィルが彼の数少ない友人の一人オギュスト・ル・プレヴォに 1818 年 12 月 18 日に宛てた手紙の一節だ。訳すにあたり、ここでは「ロマン」という語を文意に則して「古代ローマ風の」と記しておく。

「私は何度かあなたに古代ローマ風の〔roman〕建築という言い方をしました。これは私なりの用語で、サクソン人のとかノルマン人のといった無意味な言葉に代わるものとして、我ながらうまく考案されたと思える言葉なのです。衆目の一致するところでは、この重苦しくて、粗雑な建築は、我々の粗野な先祖たちによって不自然にされていった、つまり次々と劣悪にされていった、〈古代ローマの作品〉〔opus romanum〕なのです。そのときまたラテン語も、同じようにゆがめられて、ロマン語になっていきました。このロマン語の起源と劣悪化は、〔古代ローマ風の〕建築の起源および劣悪化と多くの類似性を持っています。ですから、どうか、この

私の古代ローマ風のという名称はじつにうまく見つけれられたと言ってほしいのです」(1818年12月18日付け、オギュスト・ル・プレヴォ宛てのシャルル・ド・ジェルヴィルの手紙)⁽⁴⁾

イギリスの研究者たちは、ゴシック以前の中世教会堂を名づけるにサクソン人の建築、ノルマン人の建築という言い方をしていた。ジェルヴィルがこうした言い方を無意味だと断じているのは、そのように種族の名前で建築を指示してもそれがどういう建築なのかにわかに伝わってこないことによる。

これに対し、ジェルヴィルが持ちだした「古代ローマ風の建築」という表現からは、古代ローマの建築と似てはいるが異なる、古代ローマの建築に起源はあるがそれから変異しているというロマネスク教会堂建築の基本的な在り方が伝わってくる。

ジェルヴィルは、このような表現の仕方を言語学から学んだのだった。「古代ローマ風の」と私が訳した「ロマン」(roman)というフランス語は、当時すでに言語学の分野で「ロマン語」(la langue romane, le roman)なる表現で定着していた。

ロマン語

このロマン語とは何なのか。

古代ローマ帝国の公用語はラテン語だった。この帝国の支配下に入ったガリア(今のフランスの地)およびその他の属州でも、ローマ人を中心にラテン語が公用語として使われた。このラテン語には二種類あった。古典ラテン語と俗ラテン語である。古典ラテン語はしっかりした文法からなる堅固な言語で、主に公文書、文学書に用いられた。属州でこれを話す人もいたが、社会の上層部の人間に限られていた。俗ラテン語は、古典ラテン語から派生した口語、言わば話し言葉で、役人、商人、兵士などによって仕事の場で、ふだんの生活の場で、広く使われていた。

この俗ラテン語は、紀元3世紀、4世紀と時がたつにつれ、各属州ごとにそれぞれの風土や慣習の影響を受けて、地方分化を強めていった。言わば方言のようになって、古典ラテン語からどんどん離れていった。この言語の変化を導いたのは、言語それ自体のなかでは発音という要素だった。口語であるからこれも当然であろうが、しかし声に出す、口から音声を出すという生の表出の動

きが言語の形態を変えていったのだ。このことはロマネスクにおける内奥の表出との関連で留意しておいてよい。

476年に西ローマ帝国が減びると、この俗ラテン語の地方分化、古典ラテン語からの離脱はいっそう進み、俗ラテン語はもはやラテン語とは言えない言語へ変貌していった。ロマン語とは、476年から9世紀頃までの間に旧属州それぞれにおいて俗ラテン語が変化して形成されていった言語のことを指す。現代のロマンス語諸語、すなわちポルトガル語、スペイン語、カタルニア語、フランス語、イタリア語、ルーマニア語は、各地の「ロマン語」が母体になって生まれた言語にほかならない。

二つの疑問

ジェルヴィルの手紙に戻ると、二つのことが疑問として生じてくる。

一つは、ロマン語が5世紀から9世紀にかけての言語だとすると、この年代はロマネスク教会堂の年代と合致しないのではないか。ロマネスク教会堂の建築様式としては早すぎるのではないか、という疑問である。もう一つは「古代ローマ風の」というジェルヴィルの規定からは、ロマネスクへの蔑視が見てとれるのではないか。ジェルヴィルはロマネスクを本当に再評価しているのか、という疑問である。

年代の点に関しては、1820年に「ラボルト調査」の報告文としてジェルヴィルがマンシュ県知事に提出したテキスト「マンシュ県の教会建築に関する書簡」が参考になる。このテキストは、『ノルマンディー好古家協会会報』の創刊号(1824)に掲載されたが、そのなかでジェルヴィルは、ロマネスク教会堂の建設年代を「シャルルマーニュ(742-814、フランク王としての在位は768-814、西ローマ皇帝としての在位は、800-814)の治世から12世紀初めまで」だとして、ロマン語の年代と切り離して記している。9世紀頃から12世紀初めまで。おおむね妥当なロマネスクの建設年代だ。

ジェルヴィルは、1843年にこのテキストを冊子として出版していて、その「まえがき」では「11世紀から13世紀末まで」としている。こちらの方が今日のロマネスク年代の一般的な見解に近いと言える。だが私としては、できるだけ年代に幅をもたせて、つまり過去について言えばもっと早い時代に溯ってロマネスクを根源から理解してみたく、9世紀頃からというジェルヴィルの前者の年代設定に与^{くみ}したい。いやじつは、のちに紹介する弟子のコーモンの「古

代ローマの支配の後から 12 世紀まで」というロマン語の年代も入ってしまう広い設定に拠っておいた方が、よりよく、「古代ローマ風」の特徴が捉えられるとさえ思っている。

ジェルヴィルはロマネスクを蔑視していたのか

次に、ジェルヴィルの書簡から生じるもう一つの疑問だが、それは、ラテン語が「ゆがめられて」ロマン語になったというジェルヴィルの見方に関係する。彼は、ロマン語もロマネスク教会堂も、〈古代ローマの作品〉の劣悪化とみなしている。古代ローマ文明を上位に置いて、そこからの低下として中世の文化を見ている。イギリスでゴシック・リヴァイヴァルを体験し中世を見直す必要性に駆られて帰仏した人ならば、このように中世を低く見るのは矛盾したことではないのか。「古代ローマ風の」というロマネスクの規定を軽蔑の念とともに呈示するのはおかしいのではないか。「この重苦しくて、粗雑な建築は、我々の粗野な先祖たちによって不自然にされていった、つまり次々と劣悪にされていった、〈古代ローマの作品〉」などという言い方はしないのではあるまいか。

闇に沈むロマネスク

たしかにジェルヴィルもまた当時の多くのフランス人と同様に、古代ギリシア・ローマの文化所産を尊ぶ古典主義の考え方に従っていた。しかし中世を軽蔑するあまり、ロマネスク教会堂を識別せず固有の様式名も与えようとせず闇のなかにただ葬っておいた大半のフランスの歴史家に較べれば、ジェルヴィルの方がはるかに古典主義の呪縛から解かれていたと言える。

オーバン＝ルイ・ミラン（1759-1818）は、首都パリの歴史研究の大立物で最後には国立図書館の館長職にまで就いた人だが、1790 年から大作『国民の歴史遺産』を出版した。フランスの城、宮殿、修道院、教会堂を 5 巻にわたって図版入りで紹介するこの試みは、当時の革命政権下の国民議会に提出され、第 1 巻からすでに称賛を受けている。ルネサンス以降の建造物が好んで取りあげられているこの書物のなかで、中世の建造物が本格的に語られるのは、やっと第 2 巻の末、マントのノートル・ダム大聖堂を扱った第 29 章においてだ。ここでミランは、ゴシック様式全般の解説をおこなっているのだが、その見方は当時から 250 年も前のルネサンス期イタリア文化人の見方を基本的に踏襲していて、侮蔑的であり、また大雑把である。

ミランによれば、3世紀からヨーロッパは北方の諸民族によって荒らされ、美と英知の結晶である古代ギリシア・ローマの建築物は次々に破壊されていった。やっと15世紀末イタリア・ルネサンスにおいてこの美しく知的な建築様式は復活を遂げるが、そのように復活が遅れたのはひとえに野蛮な北方民族の一派ゴート人がとんでもない建築物を広めたことによる。ミランは、そのゴート人の建築の非理性的な特徴を古代ギリシア・ローマ建築の理性的な特徴と比較しながら次のように紹介する。

「彼らゴート人はまず、ギリシア建築の簡素さを、取捨選択におけるその英知を、装飾使用におけるその節度を捨て去ることから始めた。彼らは、ギリシア建築の各構成部分がどれほど役に立っているかその事実上の、あるいは合意の上での有用性をもはや見ないという習慣を身につけてしまっていた。彼らは、見る者の目を楽しませるギリシア建築のあの優雅な安定性を捨てて、向こうみずな大胆さへ走っていった。それは、どんな大胆不敵な鑑賞者でも一目見ただけで恐怖で縮みあがるほどの大胆さだった。ギリシア・ローマ建築の特徴をなす直角、円形にかわって、先の尖った角度が用いられた。変則的な曲線のなかでも最も先の尖った曲線が用いられたのだ。そうして或る時代には、巨大なヴォールト天井〔石造りの曲面天井のこと、きやうりやう窮隆とも〕が、ずんぐりと重苦しい付け柱の上にのせられた。これはゴシック建築の初期のことである。また別の時代には、軽そうで中空の束ね柱たばの上に、どれほど目のきく人にも追いきれないようなトンネル状のヴォールト天井が立ち上げられた。これはゴシック建築の第二期のことである。アーチの角度はすべて斜めであり、その交差部分には、滑稽な醜さ、陰鬱な陽気さの人面像が飾られ、柱頭には奇妙な葉の群れや幻想的な動物が彫りこまれた。日差しはただ無数の石の切り口から入ってくるだけだった。この建築作業の長所をあげるとすれば、どの方向にも裁断できる木材の特性を最大限石材に発揮してみせたということだ。結局、自然は永久に捨て去られたかのようになってしまった。この野蛮な数世紀においては、人は、自然に対して示す隔たりによってのみ、際立っていただけだった」(オーバン＝ルイ・ミラン著『国民の歴史遺産』第2巻〔1791年〕、第29章の7-8頁)。

この一節からはいくつか重要なことが読みとれる。まず、3世紀から15世紀末までの間に、つまり古代ローマ帝国の後期からイタリア・ルネサンスの初めまでの間にミランは、北方民族（一般に蛮族と呼ばれる）の略奪とゴート人による野蛮な建築しか見ていないということである。ヨーロッパの中世がほぼまるごとおさまってしまうこの長い期間に彼は、ゴシックとは違う形式の建築があったことを認識しようとしていない。わずかに初期ゴシックの規定にある「ずんぐりと重苦しい付け柱」、第二期の「トンネル状のヴォールト天井」という表現にロマネスク教会堂の影が見出せる程度だ。逆に言うと、ゴシック様式の説明としてはあまり精密ではないということである。柱頭の「奇妙な葉の群れや幻想的な動物」の彫刻も、どちらかというとロマネスク教会堂の特徴である。

美と有用性

もう一点、ミランの文章で注目しておきたいことがある。それは、ギリシア・ローマの建築において一つの構成部分が他の構成部分に役立っているという有用性の指摘である。有用性、つまり他の部分の役に立っているという有機的なつながりが、ギリシア・ローマの建築の「優雅な安定性」を形成し、英知に満ちた美しさを作りあげているとミランは見ている。そしてそこに、つまり有機的なつながりに、自然の本質があると見ている。

この見方は、一人ミランだけの問題ではなく、イタリア・ルネサンス以降の古典主義者たちに共通の見方だった。そして、19世紀の西欧、さらに20世紀の西欧においてもまだ多くの人によって支持され、近代文明の発展に寄与した見方でもある。

ルネサンス以降の人々がとくに注目したのは人間の身体の構造である。人体は代表的な自然の産物である。内臓の一つ一つの器官は有機的につながって他の器官の働きに役立っている。骨、筋肉も同様である。一個の人間の身体は、このように秩序ある生命体を形成しており、さらにそのようなものとして他の人間に、人間の集団である社会に、つながってその発展を可能にしている。この有用性を重視する自然観、人間観からすれば、有機的なつながりを破るような内奥の生命の表出は極力避けねばならない事態だ。この生命の表出も、人間、そして自然の重要な本質であるはずなのだが、有機的なつながりの方を重視するあまり、ルネサンス以降の古典主義者たちからは不自然として看過され

たり、蔑視された。

ミランから見てゴシック様式の建築は、過剰な装飾といい、むやみに高い柱といい、変則的な尖頭アーチといい、有機的なつながりを無視した不自然な代物しろものにすぎなかった。中世の人々は「自然に対して示す隔たりによってのみ、際立っていただけだった」。

好奇心の美学

フランスの古典主義者たちから見て、ゴシック様式の大聖堂は不自然な建築であり、「悪い趣味」(le mauvais goût)の造形表現にほかならなかった。これに対し、18世紀にいち早くゴシックを復活させていたイギリスでは、有機的なつながりを破る野性的な力を自然の重要な本質とみなして、積極的に肯定する傾向があった。古典主義が捨て去られたというわけではない。美の規範として古典主義の捉え方は相変わらず尊重されていた。しかし同時に、古典主義の美にそぐわない自然の野性的な力、そのような力を感じさせる文化遺産、造形表現を高く評価する気運があった。curious（好奇心をそそる）という英語の形容詞を多用しながら、非古典主義的なものの魅力を積極的に語っていく心の幅が当時の、つまり18-19世紀のイギリス人にはあった。

拙著『ゴシックとは何か』の「あとがき」で私は、ウィリアム・スタックレー(1687-1765)の著作『好奇心をそそる旅』(1724)に言及している。原題はラテン語であるが(*Itinerarium Curiosum*)、「好奇心をそそる」という視点からイギリスのストーンヘンジ、ケルトのドルイド教、ゴシックの大聖堂が紹介されている。

「好奇心には文化を刷新させる力がある」と私はこの「あとがき」で書いた。まさしく好奇心は、外面の形状の美にこだわる古典主義の見方では捉えられないものに反応し、これを新たに文化の前面へ押し出す力を持つ。ジェルヴィルがイギリス滞在中に体感したものは、この好奇心による中世の再評価の動きだったと言ってよい。

再びタンのサン・ピエール教会堂

タンはノルマンディー地方のカルヴァドス県にあるため、ジェルヴィルの「ラボルド調査」の報告文「マンシュ県の教会建築に関する書簡」のなかでは言及されていない。しかし、オギュスト・ル・プレヴォに宛てた手紙には、こ

の村の教会堂への彼の讃嘆の言葉が見出せる。

「タンの教会堂は何と好奇心をそそることでしょう！ 外壁の周囲すべてにめぐらされた^{めくらまど}盲窓〔開口部のない壁面装飾用の窓〕の何と美しい列！ 正面扉口の押しつぶされてしまった様！ いえ、四つんばいになって入らねばならない教会堂が想像できるというのでしたら話は別ですが。こんな珍しいものを想像せよと言われても、なかなか難しいでしょう……。我が恋人に贈る讃辞として次の表現以上のものを私は思いつきません。“あなたは美しくて清らかで魅力的だ、タンの教会堂のように”」（1818年5月10日付け、オギュスト・ル・プレヴォ宛てのシャルル・ド・ジェルヴィルの手紙）。

このような恋人がジェルヴィルの身近にいたとは思えないが、この手紙の一節で興味深いのは「好奇心をそそる」という視点と古典主義的な美の視点が混在していることだ。

外壁の回りに飾られた盲窓の列は「ロンバルディア帯」とも呼ばれる小さな半円形アーチの連なりであり、イタリアのロンバルディア地方から広まったロマネスク教会堂特有の装飾である。じっさいに壁を穿^{うが}っていないので窓としては役立たずだ。そのような無用のものが建物の壁に過剰に作られている点、まさしくこの装飾は中世の非理性的な特徴を表しているのだが、しかし古代ローマ建築の基本的な要素である半円形アーチが使用されていて、しかもそれが整然と並んでいる点は、古典主義の美にかなっている。ジェルヴィルはこの美に感じ入っている。

他方で彼は、正面扉口の小ささに関心を覚え、その不均衡を面白がっている。私が見た限り「四つんばいになって入らねばな



モノクロ図版 3
アルシス・ド・コーモン

らない」ことなどまったくないのだが、たしかに建物全体の大きさに比して西正面の扉口は規模が小さい。重要なのは、この非古典主義的なアンバランスを、ジェルヴィルが醜いだとか劣悪だと単純に決めつけて終しまいにせず、興味深く捉えてプレヴォに楽しげに紹介していることである。

古典主義の美を尊敬しながらも、それに全面的に服することなく、非古典主義的な不均衡、不調和の表現にも心を開き、それを積極的に評価していく姿勢。これは一人ジェルヴィルだけでなく、ノルマンディー好古家協会の会員たちが共有していた姿勢だ。とりわけジェルヴィルの後継者アルシス・ド・コーモン（1801-73）はそうだった（モノクロ図版3）。

6. より広く、より深くロマネスクを伝える

ジェルヴィルの後継者

ノルマンディー好古家協会は1824年に設立された。同じ年に出版されたこの協会の会報の創刊号は活気に溢れている。収録されている報告文、論文の総数は23。頁数は全部で700を越える。

ジェルヴィルは人望がなかったせいか、この協会の幹事には選ばれていないが、この会報に先の報告文のほかにノルマンディー地方の中世の建築物について二つの文章を発表している（「モルタンの教会堂とクータンスの大聖堂に関する詳細」、「マンシュ県の古城に関する論考」）。

コーモンは23歳の若さでこの協会の副事務局長に抜擢されている。そして前年から二度おこなった講演の原稿をもとに本格的な教会建築史論「中世の宗教建築に関する試論——ノルマンディー地方を中心に」を153頁にわたって発表した。

その初めの方で彼は、学問の成果を一般の多くの人に伝達するという学者として開かれた姿勢を取ることを明言している。「一言で言えば私は、今日まで、学者たちのためにというよりは一般の人のために研究活動をおこなってきた。私の目的は、歴史建造物の学問を可能な限り一般に普及することにある」。

ロマネスクという様式名、そしてこの建築物の特徴も、彼のこの試論およびその後の学者としての精力的で開かれた活動によって、広く世に知れ渡っていった。

「このロマネスクという言葉〔仏語の roman〕は、ジェルヴィル氏によって呈示された呼び名であり、古代ローマの支配の後から 12 世紀までの半円形アーチを使用した建築物を言い表わすために用いられている。この言葉は、他のどの言葉よりも正確である。この言葉が用いられる前には、この時代の建築物を名ざすのに曖昧で不適切な言葉しかなかったのだ。ノルマンディー地方では主に、ロンバルディア人の、サクソン人の、ノルマン人のという名で知られ、イギリスではアングロ＝ノルマンのという名で知られていた。この建築物は、各地方ごとのわずかな相違を別にすれば、至るところで同一であり、それゆえ一つの名称だけを持つべきなのであって、まさしくそこにこの建築物にロマネスクという名称を与える利点がある。さらにもう一つこの言葉を使う利点がある。この建築物の起源が示されるという利点だ。この言葉はじつのところ、この建築物と同じ時代の言語〔ロマン語〕を名ざすのにすでに使われていたのであって、その意味では新しい言葉というわけではない。ロマン語はラテン語が退化した言語である。ロマネスク建築も古代ローマの建築が変質した建築である」(アルシス・ド・コーモン「中世の宗教建築に関する試論——ノルマンディー地方を中心に」、『ノルマンディー好古家協会会報』創刊号〔1824 年〕, 550 頁)。

一見してコーモンはジェルヴィルの考えをよく汲んでロマネスクという様式名を継承しているが、しかしロマネスク教会堂の地方ごとの差を重視していない点には問題がある。

分類の精神

事物の外観にこだわる古典主義の見方は近代科学にも影響を与えた。コーモンは、この近代科学、とくに近代生物学の分類法にも動かされて、ロマネスクを捉えている。

ジェルヴィルもそうだが、コーモンもカール・フォン・リンネ (1707-78) 以来の近代生物学に造詣が深く、そこから、外見の特徴に基く生物の分類法を学んでいる。簡単に言えば、典型と変種に分けるやり方だ。動植物の形状を数多く観察して一つの種の典型を割りだし、さらに、この典型の本性を失って「退化」し「変質」してしまった存在を変種とみなして、典型の下位に置くや

り方である。

この高低の階層的な分類法には、高低の価値観が付着してくる危険がつねについてまわる。典型を尊び、変種を蔑むという価値観だ。典型の存在に純粋さ、完全さ、根源性を見出して高い価値を与え、変種の存在には異種の本性の混入を見て、その不純さ、折衷性、二次性ゆえに低い価値を与えるという価値観である。

この高低の分類法と価値観はなにも近代に始まった話ではない。古代ギリシア・ローマでは、自他の民族を分類したうえで、自民族を高く評価し、他民族を異狄（ギリシア語で barbaroi）、蛮族（ラテン語で barbarus）とみなして蔑んだ。

やがてこの見方はキリスト教に入っていき、キリスト教徒自身を文明の人間、異教徒を非文明の人間と分類し価値付けしていく習慣をもたらした。

この見方に導かれた事例を中世の西欧に求めると、すぐさま二つの異教徒攻撃が思い浮かぶ。イスラム教徒を敵視し聖地エルサレムの奪回をめざした十字軍。イスラム教徒、さらにユダヤ教徒をも排斥してスペインを純粋なキリスト教国に作りあげようとした国土回復運動である。ロマネスクの教会堂に注目すれば、そのスペインの西端サンチアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路の教会堂によく飾られた最後の審判の彫刻像があげられる。西正面扉口のテュンパヌム（扉口上部の半円形の壁面、タンパンとも呼ばれる）いっぱいには飾られたその大きな図像の中央には、再臨したイエスが位置し、人類を天国行きの人間と墮地獄の人間に分類している。悪霊の混入によって変質した人間、言わば人類の変種はイエスによって地獄に落とされていく。

だが十字軍、国土回復運動だけが中世ではない。テュンパヌムの最後の審判図だけがロマネスク教会堂ではない。

典型か変種かの分類など立てず、多様な神々、多様な精霊たちに魅せられていた民間の土着の信仰が、中世の西欧を、ロマネスク教会堂を、活気づけていた。風土の自然に根ざした、そして風土ごとに異なる民間の信仰心が、様々な形状の教会堂を生みだしていた。

典型への執着

先に引用したコーモンの試論の一節に戻ると、彼は、ラテン語、古代ローマ建築を典型とみなし、そこから退化し変質した変種としてロマン語、ロマネス

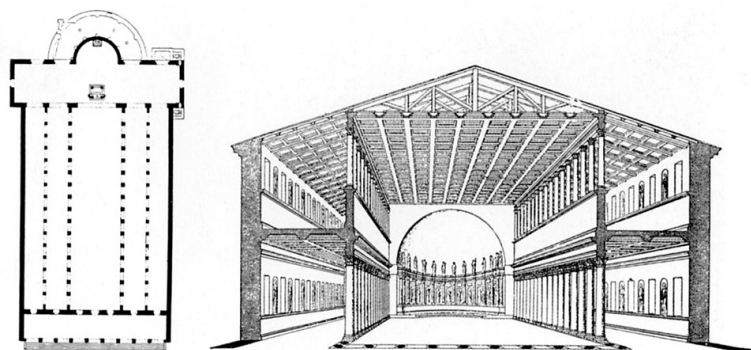
ク教会堂を捉えている。この捉え方はすでにジェルヴィルにも見てとれたが、しかしコーモンの場合、問題なのは、典型という発想への執着が強すぎて、ロマネスクをも一つの典型におさめようとしていることだ。「この建築物は、各地方ごとのわずかな相違を別にすれば、至るところで同一であり、それゆえ一つの名称だけを持つべきなのであって」というくだりにそれがうかがえる。

ジェルヴィルの場合、「サクソン人の」「ノルマン人の」という種族名では出てこない建築の特徴が「ロマネスク」つまり「古代ローマ風の」という呼び名ですぐさま伝わるがゆえに、この呼び名を選んだのだった。地方の差がないとは彼は言っていない。

じっさいのところ、各地方ごとの差が著しいのがロマネスク教会堂である。各地方ごと、いやノルマンディー地方一つのなかでさえ、様々な形状のロマネスク教会堂が存在する。あれもロマネスク、これもロマネスクと言ってしまう幅の広さがロマネスクなのだ。古代ローマの建築を仰ぎ見ながらも、その建築の枠から多様に出ていったというのが「古代ローマ風の」この建築群の姿である。古代ローマの建築に似てはいるが異なるということの裾野は広く、多種多様な教会が林立している。

起源と変容

では、ロマネスク教会堂が似ているという古代ローマの建築は、具体的にはどういう建築物なのだろうか。ロマネスク建築の起源は何なのだろうか。



モノクロ図版 4

古代ローマ、バジリカ式聖堂の平面図（左）と内部（右），
ラテラノ大聖堂，5世紀創建当時。

古代ローマの公共建築物の一つで、裁判所や商業取引の場として用いられていた多目的な集会施設バジリカが、ロマネスク教会堂の起源である（モノクロ図版4）。これは今日では定説になっているが、フランスにおける最初の中世建築史論であるコーモンのこの試論ですでに明示されていることには目を見張らされる。

皇帝トラヤヌス（53-117）が113年にローマに築いたバジリカ・ウルピアの内部復元図を見ると、長胴形の建物の中央に列柱が左右対称に並んで身廊が形成され、その両側にさらに列柱が並んで側廊が形成されている。身廊の奥には半円形に後陣（アプシス）が広がっていて、その上部にはこれまた半円形のアーチがかけられている。整然とした幾何学的な構造だ。

その美しさに魅せられて皇帝コンスタンティヌス1世（274-337）は、313年キリスト教を公認したのち、バジリカ・ウルピアを手本にサン・ピエトロ教会堂を建てさせた（330年頃）と言われている。現在のヴァチカンのサン・ピエトロ聖堂の初代の建物である。

だが、コーモンに言わせれば、コンスタンティヌス1世の時代にはもうすでに古代ローマ建築は、古代ギリシアから受けついで美しき簡素さを失って退化しつつあった。過剰な装飾、不規則な作りが混入して変質しはじめていた。キリスト教建築は、コンスタンティヌス1世がローマおよび帝国の全属州に教会堂の建設を命じたこの最初期においてすでに「野蛮さ」(barbarie) に冒されかけていたのであり、中世へと時代が下っていくにつれ、その様式悪化の傾向をよりいっそう顕著に見せていった。コーモンは、しかし、その変容の歴史をたどることは「好奇心をそそる」(仏語で *curieux*) ことだと書くのである。

コーモンの好奇心

彼はただ単に古典主義の見方に凝り固まっていたわけではない。ジェルヴィールと同様に、古典主義の美から逸脱した造形表現に心を開き、感動で生命を躍動させていた。ノルマンディー地方の中世教会堂を巡る実地踏査は、彼にとってまさしく「好奇心をそそる旅」だった。或る教会堂に行き着くと、彼の思いは、その外観から、風土に根ざしたかつての人々の生活の全体へ向かった。

「この研究は尽きることのない喜びの源泉である。或る歴史建造物を見

ると我々はその外観からこの建物がいつ頃建てられたのか見当をつけることができるが、そのとき同時に過去への多くの思いに襲われる。この建物を建てた人々はどういう人たちだったのか、彼らの生活習慣、社会制度、芸術はどんなだったのかという思いが、この建物の外観と結びついて我々の心に去来する。そして、彼らが残した趣向と才気の跡を探索してみたいと思うようになるのである。このうえなく豪華な大聖堂から田舎のつましい教会堂まで、すべてが新たな興味をかきたてる」(アルシス・ド・コーモン「中世の宗教建築に関する試論——ノルマンディー地方を中心に」、『ノルマンディー好古家協会会報』創刊号(1824年)、537-538頁)。

ノルマンディー地方の田舎の教会堂はとくに彼の心に残り、この本文の脚注で彼は続けてこう記している。

「カルヴァドス県、マンシュ県、ユール県、オルヌ県の田舎の教会堂を訪れたときの喜びは、きつといつまでも思いだすことになるだろう。何かしら好奇心をそそるものを見出したいという期待は私のなかで不安な思いを生んだが、その思いはきまって快い数々の印象に成り変っていった」(同会報、538頁の脚注(1))。

コーモンはロマネスク様式の年代を、5世紀後半の西ローマ帝国の滅亡のあとから12世紀半ばのゴシック様式の登場までと、幅をもって設定し、この建築の特徴の出現を世紀を追って紹介している。すなわち古代ローマのバジリカの後陣部分が大きく発達して内陣ができ、それと交差するかたちで翼廊が伸びてラテン十字形(十)の平面プランを持つようになったこと。そこに、古代ローマのバジリカにはなかった鐘塔が乗せられ、やがてその鐘塔が大きな塔に成長していったこと。建物の下には、古代ローマのバジリカはむろんのこと神殿にもなかったクリプト(地下祭室)が掘られていったこと。建物の全体に半円形アーチを基本にした石造り天井がかけられるようになっていったこと等々、今日ではロマネスク教会堂のそれとしてよく知られている特徴を丁寧に説いている。

この解説の途次でさすがにコーモンも、これらの特徴がノルマンディー地方内においてさえ一律でないことを認めている。例えば塔が一基のものもあれば

二基のものもあったり、その位置が内陣－身廊と翼廊の交差部の上であったり、西正面の左右両側であったりと、ロマネスク教会堂が多様な形状を呈していることに言及している。だが彼がロマネスクの多様性に心底驚き、強く好奇心をかきたてられているのは、過剰で異様な装飾に対してだ。古典主義の見方では「野蛮性」そのものと形容されてしまう造形表現に対して、例えば柱頭の彫刻に対してである。

中世の文化への第一歩

ロマネスク教会堂内部の列柱の頭部には彫刻が様々に施されている。起源は古代ギリシア・ローマの柱頭彫刻にある。

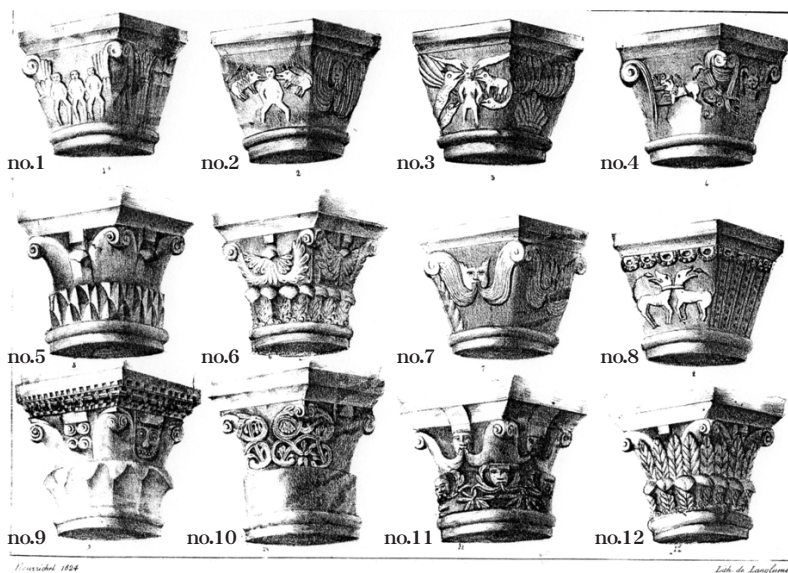
古代ギリシアのコリント式の柱の頭部にはアカンサスの葉が刻まれていた。その表現の仕方は写実を基本にしていたが、さらにそこに見た目が美しくなるように形を整える工夫もなされていた。このコリント式の柱頭装飾は、古代ローマで愛好され、神殿や宮殿、バジリカでさかんに用いられた。4-6世紀の最初期のバジリカ式教会堂でもよく用いられた。

古代ローマの属州、例えばガリア（現在のフランスの地）、ブリタニア（現在のイギリス）の諸都市には、ローマと同様の建築物が建てられたが、それらは中世になっても比較的よく形状を保って残存していた。ジェルヴィル、コーモンによれば、中世の建築職人たちは、それら古代ローマの遺構を参考にして、農村域に修道院や村の教会堂を建てていった。あるいは、ローマからやってきたキリスト教の伝道者たちが直接に建設の仕方を伝授することもあった。

しかしそうして作られていったロマネスクの教会堂は、修道院付属のものも、村落のものも、古代ローマの建築物からかけはなれた様相を呈し、柱頭の装飾もアカンサスの葉だとはにわかに判別できない非写実的でグロテスクな姿に変容した。しかもこの変質したアカンサスの葉のなかには時として不可解な生き物や模様が彫りこまれた。化け物の図像や人間が化け物に食いつかれそうになっている図像も出てくる。コーモンはとりわけそれら異様な図像に好奇心をそそられている。そのような柱頭の怪物図像のくぐりや、彼の試論のなかで執筆に興がのっているように感じられる個所だ。

「柱頭には、多くの場合、コリント様式やコンポジット様式〔コリント様式のアカンサス模様とイオニア様式の渦巻模様を混合させた様式〕が採

用されている。イオニア様式も、作例はずっと少ないが採用されている。ともかく柱頭は様々な様式が結合されていて、ヴァラエティに富んでいる。大きな水鳥が浮き彫りで装飾されていたり、細長いシュロの葉の模様で半分まで被われていたりする。組みも模様の入った^{くりがた}刳形が彫り込まれている例もある（サン・ローのサント・クロワ教会堂）。他方で、猥褻な像やグリフォン〔獅子の体に鷲の頭と翼を持つ怪物〕、恋結び模様〔横8の字形に組み合わせた飾りひもの模様〕、グロテスクな人頭像、長い尾の先が二つに分かれている化け物（この化け物はほとんどどれも頭をのけぞらせていて、自分の尾の先をかじっている）が表現されている。さらにまた別の柱頭では、その角の所が動物の頭になっていて、柱頭の左右へ二つの体が伸びている（セヌ下流県のポシエルヴィルのサン・ジョルジュ教会堂〔モノクロ図版2のコットマンの水彩画を参照のこと〕やカルヴァドス県のビュリーやユパンの教会堂）。また別の柱頭では、^{キマイラ}怪獣〔様々な動物の異なる部分からなる生き物〕、蛇、竜、その他彫刻家の想像力から

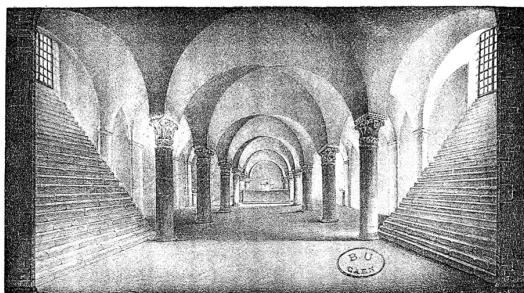


Chapiteaux romans

モノクロ図版 5

コーモンの論文「中世の宗教建築に関する試論——ノルマンディー地方を中心に」の図版

出てきたありとあらゆる説明のつかない産物を見出すことができる。もちろん寓意的な形象や宗教史に出自する場面もあるのだが。私は、添付図版3の2（モノクロ図版5）に、12のロマネスクの柱頭彫刻を集めたが、それらは11世紀の建築の細部がどのよう



Crypte de l'Église cathédrale de Bayeux

モノクロ図版6

バイユー大聖堂の地下聖堂（11世紀）、コーモンの論文「中世の宗教建築に関する試論——ノルマンディー地方を中心に」の挿絵

あったかを教えてくれる。この図版の1, 2, 3, 4, 7, 8番の図像はバイユー近くのリーの教会堂に出自している。そのなかのとくに1, 2, 3番の図像は、野蛮な様式という点で、そしてまたそれらが表している主題という点で、好奇心をそそる。これとほぼ同じ主題を私はバイユー地区のコルヴィルとユパンで見出したし、カン地区のビュリー、マンシュ県のスリジーでも見出した。その主題とは、怪物たちによってむさぼり食われる人間というものだ。この図版の5, 6, 9, 10番の図像は、リー教会堂の図像とはまったく異なっている。それらは、このジャンルで私が目にしたもののなかで最もはっきりした形象であったが、それらはバイユー大聖堂の地下聖堂（モノクロ図版6）に出自している。それらは、バイユーの城の土台部分から発見された古代ローマの柱と似ているところがある。[……] ノルマン人たちは、この地に侵攻した頃まだ残存していた古代ローマ時代の遺跡の諸部分をあちらこちらへ散乱させてしまったが、芸術に対する趣味が心に芽生えるようになったとき、それらの遺物を手本に採用したのだ。このごく自然な結果は、我々が先に示した立論の支えになる」（アルシス・ド・コーモン「中世の宗教建築に関する試論——ノルマンディー地方を中心に」、『ノルマンディー好古家協会会報』創刊号（1824）、571-573頁）。

異種の存在の混淆。二体に分裂しているようでいて一体に合成している交わ

り。横8字形模様や自分の尾に噛みつく化け物のように終わりのない流れ、つながり、運動。この動きは、きれいな直線や円を描くことはまずなく、うねうねと蛇や竜の体のように不気味で定めない進行を示し、不意に人間に襲いかかってその肉体を頭からむさぼり食っていく。それほどまでにこの動きは、つながりを、混淆を、求めている。

中世の人々が万物の底に感じとっていた生命（アニマ）の動きがロマネスク教会堂の柱頭彫刻には表現されている。事物の外観に注目しているだけでは捉えられない内面の生の動き。不可思議な交わりを重ね、予測のつかない湧出を繰り返す生の動き。それが彫刻職人の感性と呼応して、柱頭彫刻に表出している。

彫刻家の想像力を持ちだしたコーモンの指摘は評価されていい。古代ギリシア・ローマの、外観を中心にした美の捉え方からすれば、ただ醜いだけの表現が、今やまったく別の視点から、つまり想像力という人間の内面の生に立った視点から、新たに捉えられている。コーモンはまだ、中世の人々が感じとっていた生の深いつながりにまでは降りていっていないが、彼らの文化世界へ一歩踏み込んでいる。中世への近代人の第一歩だと言っていい。

病的な夢想

この中世の想像力についてそれがどういうものだったか、コーモンは何も付け加えていないが、近代人が思い描きがちな想像力、つまり現実に根を持たない一人よがりの空想や幻想と解するならば、それは違う。

中世の人々の想像力は、森や大河や海辺、あるいは農耕や祭りなどの生活の場で育まれていたものであり、現実の深部に根を持ち多くの人に共有されていた。

この会報の創刊号にはマルキなる人物によるドリユー（ノルマンディー地方に隣接するユール・

2



A. J. Marguier del.

M. de l'Esperance, François de.

モノクロ図版7

ドリユー近郊の教会堂の柱頭彫刻、マルキの論文「ドリユーで調査したいいくつかの歴史遺産について」の図版

エ・ロワール県の都市) 近郊の中世教会堂に関する報告文が掲載されているが、コーモンは試論のなかでこの報告文の一節を参照している。「好奇心をそそる柱頭」が紹介されているからだ。中世の人々の想像力についても触れられているので、そのマルキの文章の一節を引用しておこう。

「もう一つの柱頭は、さらにもっと奇妙であって、二体を持った、いやむしろ二つの部分に引き裂かれた一体の身体を持つ有翼の化け物の像を表している。その一方の先は瓜であり、もう一方の先は足だ。この化け物は、手で樽を持ち栓口から酒を飲んでいる (モノクロ図版 7)。

このようなグロテスクな彫像、このようなありとあらゆる類の化け物は、変調をきたした想像力の産物だ。この想像力の趣向は逸脱を制限するということがない。病的な夢想。これは中世の歴史建造物においてはいささかも珍しいことではない」(マルキ「ドリュエで調査したいいくつかの歴史遺産について」、『ノルマンディー好古家協会会報』創刊号 (1824 年), 67 頁)。

“変調をきたした”という言い方といい, “病的な”という形容といい, 一見して古典主義の見方に染まった中世への蔑視と読めるが, 想像力を持ちだし, その制限のない活動に触れている点, そしてそのような自由で旺盛な想像力の発露を中世文化の共通した特徴として打ち出している点, 注目に値する。これも中世への近代人の第一歩だと言っていい。広大で多様な生命のつながりに魅せられていた中世の人々の感性へ近代人が近づき, 対面しはじめた最初の兆候なのだ。

むすびにかえて

コーモンが怪物図像の柱頭彫刻として注目していたバイユー近くのリー (Ryes) のサン・マルタン教会堂 (カラー図版 14, 15) へ私は二度赴いた。堂内へ入ることができたのは再訪のときのことである。鉄道の地方線でカンからバイユーまでは 20 分ほど。バイユーからバスでまた 20 分ほど行くとリーに着く。人口 500 人足らずの小さな村で, その役場前で村長のフランソワーズ・マリー夫人を待つことになっていた。

やがて、役場の窓からこの女性村長が姿を現わし、車で村はずれのサン・マルタン教会堂へ連れていってくれた。聞けば、フランスの教会堂は、大革命以来、市町村の管轄下に置かれていて、鍵はその役場が預ることになっている。そもそもリーのサン・マルタン教会堂にはもう司祭は常住しておらず、この付近一帯を受け持つ巡回司祭が月に一度、日曜日の朝にミサをあげるだけだという。教会堂の扉が開けられるのはそのときぐらいであり、鍵を保管するリーの村役場が開くのも週に二度、午後の数時間だけとのことだった。前回の訪問時に堂内に入れず、扉の前で天を見上げた背景には、このような事情があったのだ。

車は小高い丘のふもとで止まった。斜面は墓地になっていて、上りきると教会の南扉口に出る。丸々と太った年配の女性にはきつい坂だが、マリー村長はにこやかに笑って扉を開け、その鍵と鐘塔の鍵を私に手渡した。「好きなだけ見ていくがいい。鍵は帰り際にバス停近くのパン屋に預けておいてくれればいい」。望外の配慮をマリー村長に感謝すると私は堂内に入った。

身廊のアーチと柱は、現在では12世紀初頭の建築であることが分かっている。柱は太く、柱頭は2メートルほどの高さにある。今からおよそ200年前にコーモンが好奇心に駆られた柱頭彫刻に私も見入る（カラー図版16, 17, 18, 19）。「怪物にむさぼり食われる人間」と彼が形容している図版3の2の第2番の図像は、今の研究ではどうやら旧約聖書「ダニエル書」の第6章「獅子の洞窟に投げ込まれたダニエル」を表しているらしい。そして第1番の三人の裸の男の図像は、同じ「ダニエル書」の第3章「燃え盛る炉に投げ込まれた三人の子供」の表現と目されている。いずれも神への信仰が篤かったため、難事から救われるという主題だ。だが残りの図像は分からない。特定化しえない生き物たちが様々に戯れている。ロマネスク特有の、口から何かを吐き出す生き物の図像もある。山猫か獅子か、その動物は口から二又に何かを勢いよく放出している。これは、バイユー大聖堂の地下聖堂にある柱頭彫刻とよく似ている。コーモンはリーとバイユーの図像表現の間に相違を見ているが、異なっているのは描き方であって、精神は共通している。内奥の生命の力を外へ放出して、他者と結びつきたいとする精神である。

ジェルヴィルとコーモンは、この中世の精神に好奇心を差し向けた最初の近代フランス人である。リー教会堂の鐘塔の狭い階段を上っていくと、小さな窓から、彼らがかつて馬を走らせて巡ったノルマンディー地方の村々が遠望され



カラー図版 14
リーのサン・マルタン
教会堂（12 世紀）
丘の斜面の墓地を上って
いく

カラー図版 15
リーのサン・マルタン
教会堂の内部



カラー図版 16

リーの柱頭彫刻，右下はコーモンの図版 3 の 2
(モノクロ図版 5) の no.2



カラー図版 17

リーの柱頭彫刻，右下はコーモンの図版 3 の 2
(モノクロ図版 5) の no.1



カラー図版 18

リーの柱頭彫刻，右下はコーモンの図版 3 の 2
(モノクロ図版 5) の no.7



カラー図版 19

バイユー大聖堂のクリプト（11 世紀）にある柱
頭彫刻，右下はコーモンの図版 3 の 2（モノクロ
図版 5）の no.11



た。集落と田園、人間と自然、キリスト教と民間信仰、それら近代人が截然と分けたがるものが中世の人々の目からすれば交わりあい、戯れあっていたのだろう。ジェルヴィールとコーモンは、ロマネスク概念を携えながら、この中世の人々の視世界へおぼつかない足取りで入っていったのだ。ノルマンディー地方の9月初めの晴れ渡った大空と大地に見とれながら、私は、彼らの好奇心と気概を育てた風土の力に何がしか触れたような気がした。

(了)

《注》

- (1) 酒井健著『ゴシックとは何か——大聖堂の精神史』(2000年講談社現代新書刊、2006年ちくま学芸文庫にて再刊)。
- (2) Michel Guibert, «Le “cas” de l'érudit bas-normand Charles de Gerville (1769-1853) : humour, homosexualité et paranoïa», in Guy Roux et Muriel Laharie (dir.) : *L'humour. Histoire, culture et psychologie*, Publication de la Société internationale de Psychopathologie de l'Expression et d'Art-thérapie, 1 vol., 1998 (Congrès de Biarritz, oct. 1997), p. 263-270.
- (3) デュカレルが典拠しているベータの『イギリス教会史』の第5巻第21節は「修道院長ケオルフリッドがビクト人の王に教会の建築師を派遣し、同時にカトリックの復活祭及び剃髪について書面を送ったこと」と題されている。この節のなかの次の冒頭の一節中にある「ローマ様式で自分の国に石造の教会を作る建築師の頭領」云々のくだりが、デュカレルによって紹介されている個所である。なおデュカレルは「ローマ様式」というベータのラテン語表現を *More Romanorum* としているが、ベータの原文では *morem Romanorum* となっている。またここで書かれている事柄をデュカレルは714年頃の史実として紹介している。

「当時、ブリタニアの北部地域に居住したビクト人の王ネクタンは、教会の文書に関して度々考慮した結果戒告され、復活祭遵守について自己の人民と共にそれまで持っていた誤りを棄て、自己及び自己の人民すべてが主の復活をカトリック的時期に祝賀するようにした。彼はこのことを一層容易に、一層大きな権威で成し遂げようとして、イギリス人からの援助を求めた。イギリス人はずっと前から、聖ローマの使徒の教会の範例でその宗教を確立していたということを知っていたからである。そこで彼は、ウエア川の河口、タイン川の傍、ジャロウと呼ばれる地に在り、先述した通りベネディクトの後に非常に立派に治めた祝福された使徒ペトロ及びパウロの修道院の院長、尊敬すべきケオルフリッドのもとへ使節を派遣した。復活祭の正規の時期を敢えて遵守しようとしぬ者たちを一層強く論駁することができるように、それと同時に、聖職者を識別する妥当な剃髪の様式と方法についても告諭の書面を送ってくれるように要請したのである。彼自身もこれらのことについて少なからず知っているとは考えなかった。更にまた、ローマ様式で自分の国に石造の教会を作る建築師の頭領たちを派遣してくれるように請い、その

教会を祝福された使徒たちの長のために献納することを約束した。それからまた、自分と自分の人民のすべてはローマ人の言葉や国から非常に遠く離れ、ローマの聖なる使徒の教会の習慣に精通し得なかったけれども、常にそれを模倣するであろうということを約束した。」

(ペーダ著『イギリス教会史』長友栄三郎訳、創文社、1965年、427-428頁)

なお、ペーダのラテン語原典の該当箇所を次に引用しておく。下線を施したところが「ローマ様式」にあたる表現である。

« Eo tempore Naiton rex Pictorum, qui septemtrionales Britanniae plagas inhabitant, admonitus ecclesiasticarum frequenti meditatione scripturarum, abrenunciavit errori, quo eatenus in observatione paschae cum sua gente tenebatur, et se suosque omnes ad catholicum Dominicae resurrectionis tempus celebrandum perduxit. Quod ut facilius et maiore auctoritate perficeret, quaesivit auxilium de gente Anglorum, quos iamdudum ad exemplum sanctae Romanae et apostolicae ecclesiae suam religionem instituisse cognovit. Siquidem misit legatarios ad virum venerabilem Ceolfridum, abbatem monasterii beatorum apostolorum Petri et Pauli, quod est ad ostium Viuri amnis, et iuxta amnem Tinam, in loco qui vocatur In Gyruum, cui ipse post Benedictum, de quo supra diximus, gloriosissime praeftuit ; postulans ut exhortatorias sibi literas mitteret, quibus potentius confutare posset eos qui pascha non suo tempore observare praesumerent ; simul et de tonsurae modo vel ratione qua clericos insigniri deceret : excepto quod etiam ipse in his non parva ex parte esset imbutus. Sed et architectos sibi mitti petiit, qui iuxta morem Romanorum ecclesiam de lapide in gente ipsius facerent, promittens hanc in honorem beati apostolorum principis dedicandam ; se quoque ipsum cum suis omnibus morem sanctae Romanae et apostolicae ecclesiae semper imitaturum, in quantum dumtaxat tam longe a Romanorum loquela et natione segregati hunc ediscere potuissent. »

Baedae, *Historiae Ecclesiasticae Gentis Anglorum*, Liber Quintus, Cap.XXI
« Ut Ceolfrid abbas regi Pictorum architectos ecclesiae, simul et epistolam de catholico pascha, vel de tonsure miserit », Bede Historical Works II, The Loeb Classical Library, London William Heinemann LTD, 1963, p. 325-327.

デュカレルの研究書における該当箇所も以下に引用しておく。5世紀後半から6世紀はじめにかけてイギリスに渡ってきたサクソン人がローマ人の残した遺跡を模倣して教会を建築していったこと、ただしそのローマ様式は「変質され、無骨な装飾で満たされて」いったことが指摘されている。このような言及もロマネスク概念を生み出す際にジェルヴィルを大いに触発したと思われる。ペーダから引用された「ローマ様式」にあたるラテン語には下線を施しておいた。

« These Saxons, on their arrival in England, having before their eyes each edifices as the Romans had left behind them, took their idea of building from those structures ; so that, in my opinion, what is usually called Saxon architecture, is no other than the architecture used by the Romans, greatly corrupted and loaded with uncouth ornaments, in a mode peculiar to those

northern people. This may perhaps account for what is mentioned by Bede and sir Henry Spelman, who tell us, that Naitan, king of the Picts, about the year 714, sent to Ceolfred, the abbot, for some experienced architects to build him a church of stone More Romanorum ; which request the abbot complied with. »

Andrew Coltee Ducarel, *Anglo-Norman Antiquities, considered in a tour through part of Normandy*, London, printed for the author 1767, p.101-102.

- (4) ジェルヴィルの書簡の原文は次の通りである。

« Je vous ai quelquefois parlé d'architecture romane. C'est un mot de ma façon qui me paraît heureusement inventé pour remplacer les mots insignifiants de saxone et de normand. Tout le monde convient que cette architecture, lourde et grossière, est l'opus romanum dénaturé ou successivement dégradé par nos rudes ancêtres. Alors aussi, de la langue latine, également estropiée, se faisait cette langue romane dont l'origine et la dégradation ont tant d'analogie avec l'origine et les progrès de l'architecture. Dites-moi donc, je vous prie, que mon nom romane est heureusement trouvé .»
Lettre de Charles de Gerville adressée à Auguste Le Prévost, datée du 18 décembre 1818. Citée par Ferdinand Gidon dans *L'Invention du terme, Architecture « romane » par Gerville (1818) d'après quelques lettres de Gerville à Le Prévost*. Société de Basse-Normandie, extrait du *Bulletin de la Société des Antiquaires de Normandie*, tome XLII (année 1935, pages 268-288)

(フランス現代思想／芸術論・文学部教授)